

「大川倉横結操法」 伝承活動

山梨市立日川小学校「日川地区少年水防隊」 代表 小笠原 浩

はじめに

私たちの日川地区は、山梨市の南東部に位置し、南を流れる日川と、北を流れる重川に挟まれ、地区の西端で2本の川が笛吹川に合流する三角地帯の平坦な地である。古くは徳川時代に田安陣屋が田中地区に置かれ、南部を甲州街道（現在の国道411号線）が走り、政治・文化の重要地点であった。清流と豊かな水には恵まれていたが、水害との戦いの歴史も長く、当時の地区民は幾度となく大打撃を受けたが、不撓不屈の精神とたゆまざる努力によって漸次復興した。そして、時代を先取りした果樹栽培の農業形態の切り替えにより、今日の繁栄を築きあげてきたのである。現在では、水害の歴史を伝えるお年寄りの数もめっきりと少なくなっており、護岸工事の整備とともに水害の歴史が閉ざされようとしている。



今では、観光と護岸の役目を果たす笛吹川の川倉

水害との戦いの歴史

現在では、峡東の果樹地帯として桃、ブドウの栽培が盛んに行われているが、昔は、大雨で川が氾濫し、水害に悩まされてきたところである。特に明治40年には、日川と重川の堤防が決壊し笛吹川の瀬が変わるほどの大水害となり、大勢の人々が大被害を被った。

①学校沿革誌ヨリ

「兩三日ヨリ豪雨降り続キ日川筋、重川筋、笛吹川筋一帯に水量増加シ 各所で氾濫シ堤防決潰シ 甲府盆地一帯で泥濘と化シ本県有史以来ノ大水害ヲ呈ス



日川村歌田付近の水害の様子

日川沿岸ニ位スル本校ハ 万一ヲ慮リ 校長 使丁 宿直ヲレテ日川ノ水量ノ刻々加ワルニ心痛警戒ヲ怠ラズ 一意重要書類ナラビニ御真影奉護ニ〇心努カス 夜半上流上栗原ノ村境デ堤防決潰ヲ始メ 〇〇下栗原地内ニ於テモ堤防決潰シ 村内ヲ拳ゲテ鼎ノ沸ク如ク 一大修羅状ヲ呈シ 惨々タル状況ヲ呈ス本校職員徹宵警戒スレド最早現校舎ノ 〇〇〇看守〇〇〇御真影並ニ重要書類ヲ学務委員雨宮作甫氏宅ノ文庫蔵ニ奉置ス 而ルニ何ゾ〇〇夜半本校ヨリ上流ノ堤防 降り続ク豪雨 〇〇水量増シ 遂ニ校舎全部悉ク顛覆シテ押流ス所トナル 嗚呼 明治八年開校以来 甲州街道ニ沿ヒ 輪奐ノ美ヲ誇リタル日川小学校モ遂ニ果敢ナリ形骸ヲ止メズ岩石疊々タル砂原ト化ス 学校ヲ襲イタル泥流ハ遂ニ御真影並ニ重要書類ヲ遷セン雨宮氏ノ文庫蔵ヲ襲ヒ流〇〇 安全地帯ト確信シタル 同氏ノ文庫蔵ヲ顛覆シ恐レ多クモ御真影並ニ 重要書類流失スルニ至ル 校長鶴田積穂 〇〇知ラズ自刃シテ〇トスル 僚友訓導

「大川倉横結操法」伝承活動

山梨市立日川小学校「日川地区少年水防隊」 代表 小笠原 浩

ナラビ ニ村有志ノ止ムルアリテ」

②当時の新聞より

「日川村は去る二十五日夜 日川橋人家三十余戸流失し 歌田村志村勘兵衛氏居宅裏手日川堤防決潰し 人家五十余戸流失し上栗原小字三軒家に於ける日川堤防決潰、国道を横断し上下栗原二部落を突き 四百余戸 流失せり

(中略) 又日川中学校一時危険の模様なりしを以て三浦事務員は御真影を勝沼町役場の倉庫内に奉遷し安置せり 同村の避難民五百余目下勝沼小学校内に収容し居るも食糧欠乏して救護に困難なり 同村には死亡者多数の由なるも今に判明せず 同村尋常高等小学校は全部流失したるも御真影は同村雨宮作甫氏方へ奉遷せしに間もなく同家も流失せり」

(明治40年8月28日 山梨日日新聞)

丸大消防組の誕生

徳川幕府執政の際、下栗原地区を宿場町と定め、のち明治3年5月に村政を治めた。この頃、「若者連」と称した組織があり、消防団の歴史もこの頃であろうとされている。明治6年には「若者連」から「非常連」と名前を変え、防火・防水の任務にあたるようになった。村の氏神様の大宮御所から大の字をいただき〇に大の字のハッピを着用し、村内保護は勿論のこと、隣村の火災まで出動し人民の安全に貢献したのである。明治8年5箇村が合併し日川村が誕生するのを期に、「非常連」を廃し、50余名により、丸大消防組として生まれ変わった。「大川倉横結操法」は、この丸大消防組の偉業である。

大川倉横結操法の誕生

川が増水した時に堤防が決壊するのを防ぐための「川倉」は、戦国武将武田信玄の時代にさかのぼる

ことができる伝統的な水防技術である。明治時代までは消防組の組員たちが、川の中に入って組み立てていたが、明治43年の大水の時、作業中の消防組員の1名が激流に飲み込まれ、尊い犠牲者となった。



激流の中での川倉の組み立て

その後、団員たちは安全を考え、陸地で側面を下にして横結で組み立てて、川の中へ起こす「大川倉横結操法」を試案し、研究を始めた。そして、大正3年の水害の時に、研究途中ではあったが、実際にこの方法により川倉を建て、堤防を守り、大水害を未然に防ぐことができた。その後もさらに研究を重ね、大正5年には現在伝わる横結操法が完成したのを機に、訓練の指導に県内の各村へ出向き、消防訓練に協力をした。

学校への導入

山梨県では、1983年からふるさとを知り、ふるさとを愛する子どもたちを育てる「山梨教育」が提唱され、県下各小中学校では、それぞれ地域教材を開発し取り組んだ。

当時の向山保雄校長は、この地区が水害との戦いの歴史が長いことや、それに対しての住民の団結力・協力体制などを子どもたちに伝えようと、消防団の協力を得ながら、この先祖や先輩が築きあ

げた不屈の消防精神を伝えるべく「日川地区少年水防隊」を結成し、伝承活動を進めることとした。活動を開始するにあたっては骨組みとなる丸太（直径20cm×長さ4.5m～直径10cm×長さ2m）21本を揃えなければならなかった。地区の役員や消防団の人たちが間伐材を手に入れ、1本1本丁寧に木の皮を剥いで、磨き、使えるまでにしてくれた。また、活動をしていく途中で、「出初め式で活動したり、大人の消防団と一緒に活動したりするので法被を揃えたらどうか」との声が地域の役員・有志より上がり、市当局に働きかけて、ご理解を得てそろいの法被が用意された。ヘルメットと法被を身にまとうと一段と身が引き締まってくる。

日川地区少年水防隊の活動

①練習

例年12月に入ると川倉操法の練習開始になる。まず少年水防隊の結成である。特に水害の歴史と関わりの強い下栗原地区の児童を中心に、15名程度を隊員として募集し、調整後決定される。とくに平成15年度からは、女子児童3名も加わって、新しい時代の流れも感じた。

まず、隊員たちは、水害の歴史や消防組の苦闘の歴史などを学習し、隊員としての役割について確

認する。そして、ビデオで操法を見学し、イメージが湧いてくると責任感で気分も充実してくる。丸太を組み立てる前には、各自で縄の縛り方を練習するが、今時の子どもたちにとっては難関である。同じロープを何本も用意し、各自家庭で練習をし、その後グラウンドでの組み立ての練習になる。この段階では、6年の教師の指導で進んでいくが、転任があったり担任が替わったりするので、指導者側の問題も多い。大体が5年の担任が次年度のために一緒に指導しながら覚えておくということになる。先輩教師からの引継も大切だ。

一作業ずつ指示されながら、初めての川倉が完成する。その間3～40分かかる。出来上がったものものぐらぐらする。しかし、自分たちの手で、最初に組み立てた川倉を見ると感激する。

何日かの練習を重ね、ほぼ自分たちの判断で組み立てられるようになると消防団の団員が指導にきてくださる。敬礼の仕方、整列の仕方、歩き方、号令のかけ方など基本行動についての指導を受けると、なお一層緊張感が漂ってくる。要領が分かってくると時間との戦いになってくる。最初はやっと作り上げていたのが、時間が気になり出すと、いよいよ最終段階に近い。

そして最終段階は、大人の消防団員が川倉を組み



消防団員から縄の結び方を指導していただく



最後の作業の確認をする隊員と団員たち

「大川倉横結操法」伝承活動

山梨市立日川小学校「日川地区少年水防隊」 代表 小笠原 浩

立てるのと同じペースで、一緒に組み立てることになる。校庭に2基の川倉が立つと迫力も増してくる。息を合わせるために前日まで練習が続く。



消防団の人たちと心をつなぐ

②関連学習

6年生は39名が在籍しており、そのうちの17名が水防隊として活動をした。活動するにあたっては、総合的な学習の中で水害の歴史について調べ、「大川倉」の役割や「大川倉横結操法」の誕生などについて理解し、水防隊が文化の伝承という重要な役割を果たしていることについて確認した。そして、水防隊以外の人も応援していくことにした。

また、全校児童には、「水防隊」が実際に組み立てる場面を見せ、活動の様子を理解させた。そして、



全校児童の応援を受けつつよく決めます

先輩がきびきびと活動している様子を見せて、「6年生になったらあれをやるんだ」という意欲を持たせたり、この地区が水害で苦しめられた歴史を知らせ、今は堤防が整備され水害の心配がなくなったということへの感謝の気持ちを深めさせた。

③出初め式

最大の見せ場となる出初め式であるが、本年は、1月4日に山梨市立南中学校々庭で開催された。山梨市内の7地区の消防分団の団員650名（来賓まで含めると約700名）が参加して、厳粛な中で進められていく。表彰、観閲、分列行進、消防操法に続いて日川分団第1部及び、我が「日川地区少年水防隊」による大川倉横結操法が発表される。一般の人たちの見物人も大勢見えるが、殆どが日川地区の人たちのようである。子どもたちが、このような場で発表するということが、応援にきてくれているようだ。ここでも地域の人たちの関心の高いことに驚く。



指令台で指示をする小笠原校長と宮澤分団長

発表は、大人の団員との息もぴったりと合い、15分足らずできっちりと組み立てられ、立派であった。

態度もきびきび、堂々と出来たし、号令も腹の底から大きい声でなされており、壇上で宮澤日川消

防分団長と一緒に指令を出している私は、隊員たちの取り憑かれたような真剣さと、緊迫しきった緊張感の中でてきばきと組み立て作業を進める様子に、こみ上げるものを押さえるのがやっとであった。練習の成果が十分に発揮された発表に対し、会場から大きな拍手がわき起こった。隊員はお互いにほほえみを交わし、素直に成功を喜んだ。

おわりに

日川地区少年水防隊の「大川倉横結操法」伝承活動が20年の節目を迎えた。これまで携わってきた上栗原地区を中心とした6年生の子どもたち、上栗原地区消防団の団員、指導に当たられた歴代の先

生方、そして、地域を挙げて応援して下さった地区民の皆さんの弛まざる努力によって今日まで伝えられてきた。今、校長室の壁に、「継続は力なり」と書かれた額が、スタートした年から飾られているが、まさにそのとおりの感がする。

現在の平和な地域で、水害に対する戦いの恐怖の歴史は、地区民の記憶から、一日一日と薄れていることを考えると、ふるさとを愛する子どもたちを育成する公教育の立場からも、地区消防団と協力をしながら、先祖や先輩が築きあげた、不屈の消防精神を受け継ぎ、これからも末永く伝えていく役目の重さをひしひしと感じている。